

発達障害児童の保護者と教師の協働に関するスクールカウンセラーの理解と支援

平田, 祐太郎

<https://hdl.handle.net/2324/1654624>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（心理学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏 名 : 平田 祐太郎

論 文 名 : 発達障害児童の保護者と教師の協働に関する
スクールカウンセラーの理解と支援

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、学童期の発達障害児童をもつ保護者と担任間の協働を理解する視点と、協働関係構築のプロセスを明らかにし、保護者と担任に対するスクールカウンセラーの支援についての示唆を得ることであった。

第2章では、発達障害児童の保護者と担任の協働を促進または阻害する要因について探索的に検討を行った。17名のスクールカウンセラーへの半構造化面接を行い、そこから得られた語りをデータ化して、質的研究法の1つであるグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。その結果、促進要因では4つの仮説的知見、阻害要因では5つの仮説的知見を生成し、それぞれの仮説的知見をモデルとしてまとめた。これらの仮説的知見の比較を通して、発達障害児童の保護者と担任の協働における保護者・担任を支える環境と、保護者・担任それぞれの関わり的重要性について考察を行った。そして協働を行っていく上で土台となる関係構築のプロセスの過程において、発達障害児童を持つ保護者の主体性や当事者性の重要性が明らかとなった。

第3章では、これまで先行研究において検討されていない、発達障害児童を持つ保護者が学校に対して相談・依頼を行うプロセスについて検討を行った。方法として、9名の小学校高学年以上の発達障害児童を持つ保護者を対象として半構造化面接を行い、得られたデータをグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。その結果、6つの仮説的知見を生成し、モデルとしてまとめた。以上のことより、発達障害児童を持つ保護者は学校へ相談や依頼を行う以前から、不安や迷い、さまざまな葛藤を抱えている一方で、子どもに対する親としての責任感や障害に気づき、環境へ働きかける必要性を認識していることが学校への相談や依頼につながっていることが明らかとなった。このことより、学校側やスクールカウンセラーが保護者の不安や迷い、葛藤を十分に理解した上で保護者からの相談や依頼に対応することが、その後の保護者の主体的な学校への関わりにつながる可能性が考えられた。

第4章では、スクールカウンセラーの発達障害児童の保護者と担任をめぐる協働へのアプローチについて検討を行った。スクールカウンセラーへの面接調査から、得られた30の事例に関するインタビューデータを、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。その結果、スクールカウンセラーのアプローチは、多面的な見立てに基づいた保護者・担任双方への関わりを通して、保護者と担任のつなぎを行い、子どもの成長を一緒に考える体制作りを目指していた。また、スクールカウンセラーの保護者への関わりは「保護者のニーズの汲み上げ」、「保護者の後押し」、「保護者の揺れへの寄り添い」の3つのカテゴリー、担任への関わりは「担任のバックアップ」、「他機関利用に関する担任への助言」の2つのカテゴリーで構成されていた。そして、スクールカウンセラーの保護者・担任間のつなぎはコミュニケーション、子ども理解、両者の想いの3つのカテゴリー

一に整理された。このことより学校生活場面に入り、幅広い対象者に対して関わりをもつスクールカウンセラー活動の中で、本章で得られた3つの視点が、保護者・担任間のネットワークに対する具体的な視点として活用することができる可能性が示唆された。

第5章では、筆者がスクールカウンセラーとして行った発達障害児童に対する臨床実践について、4つの事例を取り上げて事例研究を行った。第4章で得られたカテゴリーと事例を比較し、分析を行うことで、それまで得られたカテゴリーの精緻化を目指した。その結果、SCの保護者と担任の問題意識に関するアセスメントの中で重要な点として、保護者もしくは担任に、子どもの不適応状態について、協働する相手の関わりと関連づけた問題意識の有無が挙げられた。また、保護者・担任の不安や困難感に応じたスクールカウンセラーの保護者・担任間を支えるアプローチの有効性が明らかとなった。

以上の研究結果を踏まえ、第6章では総括として、発達障害児童の支援におけるネットワークのアセスメントと介入に関する知見と意義、発達障害児童の保護者の視点から協働を捉えた意義について総合的な考察を行った。そして発達障害児童の保護者と担任教師をめぐる協働の理解、発達障害児童の保護者と担任教師の協働関係構築のプロセスについて考察を行い、スクールカウンセラーの支援に関する示唆について述べた。最後に本研究で対象とした調査対象者から考えられる一般化の限界と、協働を検討する際の研究方法上の課題、児童の学校適応との関連の検討などを今後の課題として挙げた。